

イワシクジラ 北西太平洋

(Sei Whale, *Balaenoptera borealis*)



図 1. 浮上直後のイワシクジラ

最近一年間の動き

第 58 回国際捕鯨委員会(2006 年)で、将来的に本系統の詳細解析を優先課題とすることが合意され、第 59 回同委員会(2007 年)で会期間検討グループが設置された。

利用・用途

鯨肉は、刺身、大和煮(缶詰)、鯨かつ、鍋物材料として利用されている。内蔵は、ゆで物として食される。ヒゲ板は工芸品の材料として利用されている。鯨油はかつて工業原料などに用いられた。

漁業の概要

本種の捕獲は、1890 年代末に基地式の近代捕鯨によって開始された。その後、1940 年には母船式捕鯨が開始され本種も捕獲された。日本では 1911 年から捕鯨統計が整備されたが、イワシクジラとニタリクジラが分類されず、それが公式に判別されるようになった 1954 年までは統計上全てイワシクジラとして記録された。北太平洋では日本の他に、旧ソ連、米国並びにカナダが本種の捕獲を行った。

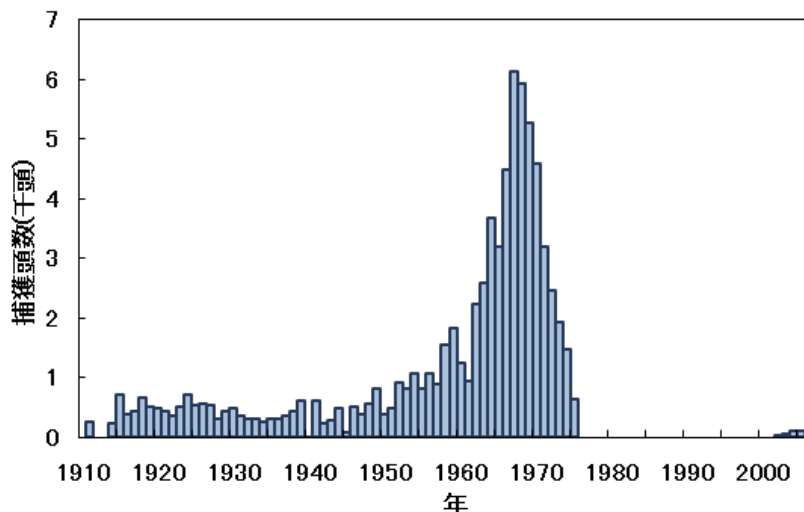


図 2. 北太平洋におけるイワシクジラの漁獲量の推移(1910～2006)

1910 年代から年間 500 頭の捕獲が 1955 年までほぼ一定して継続したが、1967 年から捕獲が急激に伸び、1968 年には 6,000 頭を超える捕獲をあげた。1968 年以後日米加ソ四カ国による「北太平洋捕鯨規則」によって捕獲割当量が定められるようになり、1970 年から IWC の条約付表に北太平洋産鯨類の捕獲枠が明示されるようになった。その後 IWC の規制が厳しくなり、1976 年から北太平洋全域で捕獲が禁止されている。商業捕鯨以外では国

際捕鯨条約第 8 条に基づく北太平洋鯨類捕獲調査により 2004 年から 100 頭を上限に(2002 年~2003 年は 50 頭上限)捕獲されている。

生物学的特性

本種はナガスクジラ科ではナガスクジラについて 3 番目に大きく、北半球産で雄 14.0 m、雌 14.8 m に達し、体重は雄 15.9 トン、雌 17.8 トンである(Masaki 1976; Horwood 1987)。

記録された最高年齢は 60 歳である。性成熟年齢は、1925 年に 10 歳であったものが 1960 年には 7 歳と報告されている。出産時期は、11 月とされ、出産海域は亜熱帯・温帯の外洋海域と想定される)。

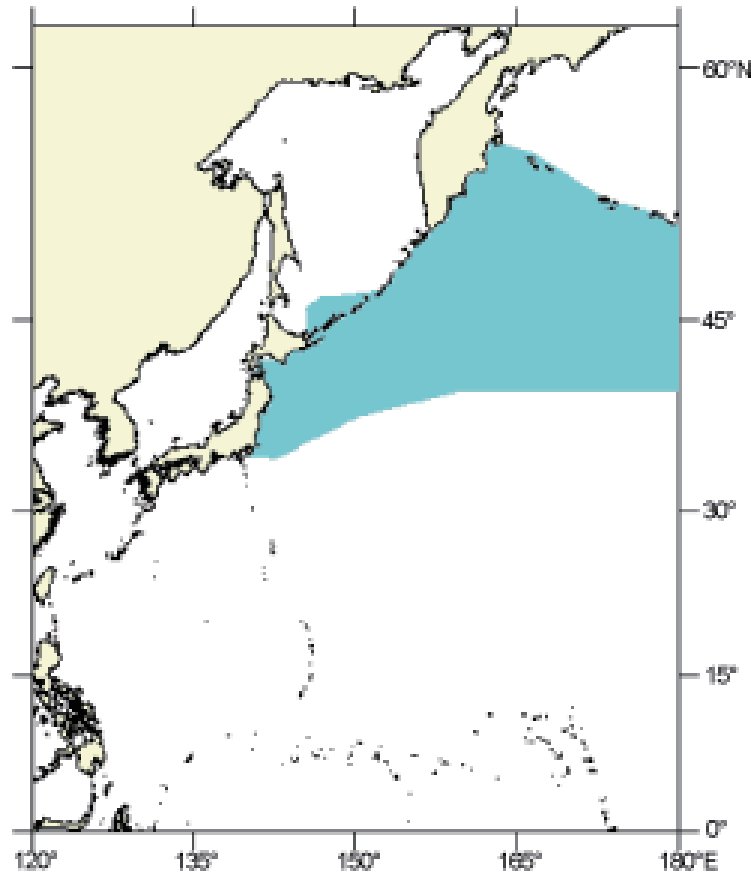


図 3. イワシクジラの分布域(青)

本種はさまざまな種類の餌生物を捕食し、知られているものとして魚類(カタクチイワシ、マイワシ、キュウリエソ、サンマ、マサバ、ハダカイワシ類など)、イカ類(スルメイカ、テカギイカなど)、動物プランクトン(オキアミ、カイアシ類)がある(根本 1962)。

本種を捕食する可能性があるものとしてはシャチがあるほか、繁殖場ではサメ類が仔鯨を襲う可能性もある。

資源状態

1975 年の IWC で本系統について初めて資源評価が行われた。手法は CPUE と発見率指数(目視調査)を統合した De Lury 法であった(Ohsumi and Wada 1974; Tillman 1977)。資源評価の結果、初期資源量は 42,000 頭、1975 年時点の資源量は 9,000 頭であるとされ、当時の管理方式では MSY レベル(23,000 頭)の 40%のため保護資源と分類された。それにより、1976 年度から北太平洋全域で本種の捕獲が禁止され現在に至っている。日本の目視調査の結果では 1980 年代始めから 1990 年代中頃にかけて北西太平洋海域で増加傾向が見られ、資源が回復しつつあるものと思われる(藤瀬ら 2004)。

しかしながら 1975 年以降、本系統に関する資源評価は行われていない。なお、2002 年と 2003 年の調査捕獲時の目視調査に基づき本種の資源量推定が行われ、調査海域内で 4,100 頭(CV=0.281)、非調査海域へ過去の目視調査結果から引き延ばし北西太平洋で 68,000 頭(CV=0.418)と推定された(Hakamada *et al.* 2004)。

管理方策

IWC では資源状態にかかわらずすべての商業捕獲が休止状態にある。我が国は 2002 年から捕獲調査を実施する一方、本種を対象とした目視調査を実施しつつあり、それらを用いて資源解析を行う必要がある。

イワシクジラ(北西太平洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	(おそらく)中位
資源動向	増加
世界の漁獲量 (最近 5 年)	0(日本を除く)
我が国の漁獲量 (最近 5 年)	39~100 頭 調査捕獲
管理目標	初期資源の 62%
資源の状態	西部北太平洋では目視調査により増加傾向判明
管理措置	捕獲は科学調査を目的としたもののみ、商業捕鯨は休止中
管理機関・関係機関	IWC

執筆者

鯨類グループ
遠洋水産研究所 外洋資源部
宮下 富夫

参考文献

- 藤瀬良弘・田村力・板東武治・小西健志・安永玄太. 2004. イワシクジラとニタリクジラ. 鯨研叢書 No.11. 日本鯨類研究所, 東京. 168 pp.
- Hakamada, T., Matsuoka, K. and Nishiwaki, S. 2004. Increase trend and abundance estimate of sei whales in the western North Pacific. Document SC/56/O19 submitted to 55th IWC. 9 pp.
- Horwood, J. 1987. The sei whale: population biology, ecology and management. Croom Helm, New York. 375 pp.
- Masaki, Y. 1976. Biological studies on the North Pacific sei whales. Bull. Far Seas Fish. Res. Lab., 14: 1-104.
- 根本敬久. 1962. ひげ鯨類の餌料. 鯨研叢書 No.4. 日本鯨類研究所, 東京. 136 pp.
- Ohsumi, S. and Wada, S. 1974. Status of whale stocks in the North Pacific, 1972. Rep. Int. Whal. Commn., 24: 114-126.
- Tillman, M.F. 1977. Estimates of population size for the North Pacific sei whales. Rep.Int. Whal. Commn., (Sp. Is.) 1: 98-106.